美術科

教科領域別研究テーマ

【生徒が見方や感じ方を広げ、主体的によりよい表現方法を探究する学習展開と評価の工夫】





美術科

生徒が見方や感じ方を広げ、主体的によりよい表現方法を探究する学習展開と評価の工夫

実践者　村上　美樹
愛媛大学研究パートナー　秋山　敏行

1　研究テーマ設定の理由

美術科では、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を育成することを目指している。美術科の授業を通して生徒がこれらの資質・能力を育むことができれば、自分たちの力でよりよいものを考え、生み出す力を高めていけるのではないかと考える。本校では、エージェンシーを「現状をよりよくする力」と定義している。この力は、生徒自身が見いだした主題をよりよい方法で表現しようと探究していく過程で身に付けたり、発揮したりしていくものだと考えている。昨年度は、デジタルポートフォリオを活用して学びの過程を生徒と教師で共有することで、生徒一人一人の成長を見取り、表現したい思いを大切にしながら授業を進めることができた。生徒が自己の主題に迫ろうと過去の学習から学んだことを取り入れたり、アイデアや表現方法を変化させたりする様子が多く見られ、自己調整力の向上を感じ取ることができた。そこで、今年度は昨年度の実践を続けながら、生徒が見方や感じ方を広げ、主体的によりよい表現方法の探究を進められるよう学習展開と評価を工夫することで、生徒がエージェンシーを発揮しながらより一層学びを深めていくことができるのではないかと考え、本研究テーマを設定した。

2　研究の内容及び方法

(1)　デジタルポートフォリオを活用した振り返りと目標設定の工夫

昨年度は、制作過程の記録や振り返りにテンプレート型のデジタルポートフォリオを活用し、生徒自身が学習の流れを把握し、作品の変化や自己の課題を確認しながら授業に取り組むことができていた。しかし、生徒によっては自己評価を基に改善点を見極めたり、次の目標設定につなげたりすることが不十分な様子も見られた。そのため、今年度はデジタルポートフォリオの内容を見直し、目標と達成度や他者からの助言などを記入できるようにするなど、生徒が自己の学びの過程や成果を自覚して、より質の高い目標を考えることができるように工夫する。また、後述する鑑賞活動での学びを意識させながら、生徒相互で成果や課題、目標設定について話し合う時間を設定し、主体的な学習の促進を図る。

(2)　生徒のメタ認知を促す鑑賞活動の工夫

美術作品の鑑賞と制作過程での相互鑑賞を関連させることで、生徒が見方や感じ方を広げ、より多くの視点から自他の作品を見つめ直すことができるようにする。学びの状況に応じて相互鑑賞を複数回実施し、生徒が他者の視点を取り入ながら自己の表現方法や作品に対する考えを深められるように、論理的思考を意識しながら評価や助言を行えるようにする。

3　研究の実際

(1)　指導計画

ア　題材名

じっくり見ると見えてくる〈粘土彫刻作品 着色編〉（第１学年）

イ　題材目標

○描画材料や紙粘土の特性を生かしながら意図に応じて表現方法を工夫し、主題を創造的に表すことができる。　「知識及び技能」

○身近なものを見つめて感じ取った特徴（造形や色彩、質感や美しさなど）を基に主題を生み出し、色彩や着色方法、技法の組み合わせなどを考え、心豊かに表現する構想を練ることができる。　「思考力、判断力、表現力等」①

○彫刻作品の造形的な良さや美しさ、作者の心情や意図と創造的な工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げることができる。　「思考力、判断力、表現力等」②

○美術の創造活動の喜びを味わい、彫刻作品の着色に関心を持ち、自分の主題や計画を基に、主体的に表現活動や鑑賞活動に取り組むことができる。

「学びに向かう力、人間性等」

ウ　題材の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
描画材料や紙粘土の特性を生かしながら意図に応じて表現方法を工夫し、主題を創造的に表している。	①身近なものを見つめて感じ取った特徴（造形や色彩、質感や美しさなど）を基に主題を生み出し、色彩や着色方法、技法の組み合わせなどを考え、心豊かに表現する構想を練っている。 ②彫刻作品の造形的な良さや美しさ、作者の心情や意図と創造的な工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げている。	美術の創造活動の喜びを味わい、彫刻作品の表現に関心を持ち、自分の主題や計画を基に、主体的に表現活動や鑑賞活動に取り組もうとしている。

エ　指導計画（全７時間）

時間	ねらい・学習活動	評価規準（評価方法）
1 本時	・着色練習を通して主題に合う色や着色方法を考える。	・彫刻作品の制作に関心を持ち、自分の主題を基に、主体的に着色練習に取り組もうとしている。 （観察・デジタルポートフォリオ）
2 3 4	・練習を生かしながら彫刻作品の着色を行う。	・描画材料や紙粘土の特性を生かしながら意図に応じて表現方法を工夫し、主題を創造的に表している。 （作品・デジタルポートフォリオ）
		・身近なものを見つめて感じ取った特徴（形や色彩、質感や美しさなど）を基に主題を生み出し、色彩や着色方法、技法の組み合わせなどを考え、心豊かに表現する構想を練っている。　（デジタルポートフォリオ）
		・美術の創造活動の喜びを味わい、彫刻作品の制作に関心を持ち、自分の主題や計画を基に、主体的に表現活動や鑑賞活動に取り組もうとしている。 （観察・デジタルポートフォリオ）
	・制作途中で相互鑑賞を行い、よりよい表現になるよう学習活動を自己調整する。	・話合いを基に、よりよい表現方法についての考えを深め、心豊かに表現する構想を練っている。 （観察・デジタルポートフォリオ）
5	・パフォーマンス課題	・パフォーマンス評価
6 7	・立体作品をより美しく見せるための展示方法について考え、台座の着色と作品の接着を行う。	・作品の主題が鑑賞者に伝わるように展示方法の構想を練っている。　（作品・デジタルポートフォリオ）
	・学習の成果を振り返り、学んだことをまとめる。	・表現活動や鑑賞活動を振り返り、学んだことや学びの生かし方について考えを深めている。 （デジタルポートフォリオ）

オ　パフォーマンス課題

私たちの彫刻作品が美術館に展示してもらえることになりました。あなたの作品の魅力が

美術館を訪れた人にも伝わるように発表しましょう。野菜や果物のみずみずしさ、重みのある存在感、質感など、モチーフから感じたことを基に考えたテーマを表現するために、あなたはどのような工夫をしましたか。制作過程を振り返り、具体的なポイントを挙げてアピールしてみましょう。

カ　指導の実際（１／７時間）

（ア）主題

モチーフをよく観察しながらよりよい着色方法を見付けよう

（イ）ねらい

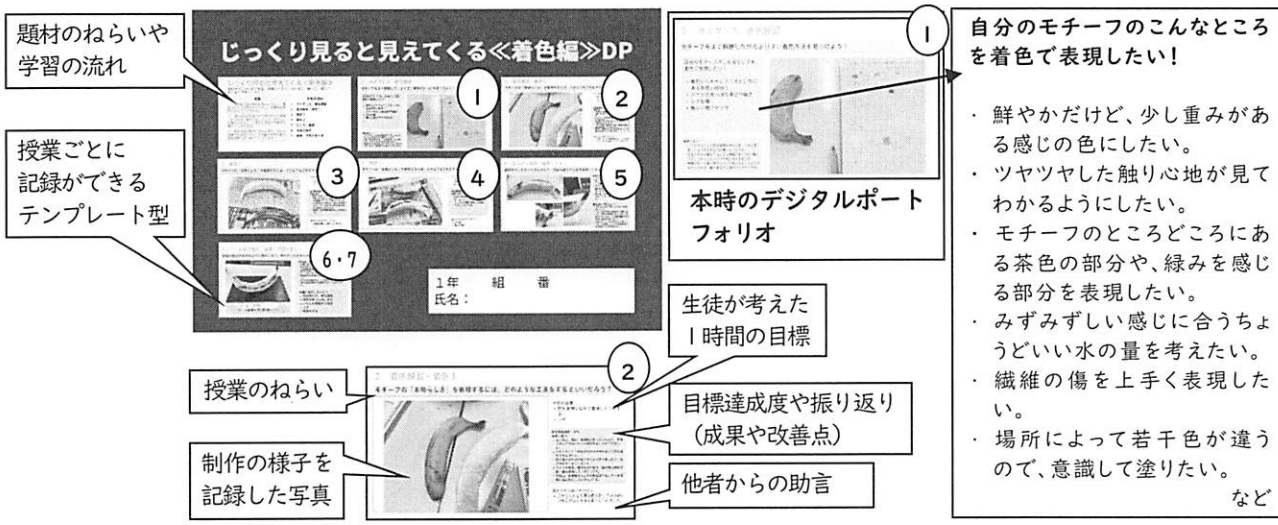
○彫刻作品の制作に関心を持ち、自分の主題を基に、主体的に着色練習に取り組むことができている。

（ウ）展開

学習活動（形態）	時間	○教師の働き掛け ・生徒の反応	○指導の工夫 ◎評価規準（評価方法）
１　学習課題を確認し、題材の目標を立てた。 （一斉→ペア→全体） 	7	○ 粘土での彫刻作品制作を振り返りながら、本題材や本時の見通しを確認しよう。 ○ モチーフを観察し、目標（表現したいところ）を考えよう。 ・ モチーフのどっしりとした印象や、ぼこぼこした質感を表現したい。 ・ 微妙な色の変化を表現したい。	○生徒に見通しを持たせるために、デジタルポートフォリオを用いて本題材の流れを説明した。 ○具体的な目標を持つことができるように、デッサンや粘土の制作を通してモチーフを観察したことを振り返りながら考えさせたり、考えた意見を共有させたりした。
		モチーフをよく観察しながらよりよい着色方法を見付けよう。	
２　着色練習のポイントを確認した。　（一斉）	3	○ プレゼンテーションを見て、着色練習(混色)のポイントを確認しよう。	○混色のポイントが理解しやすいよう、具体例をプレゼンテーションや板書で示した。
３　着色練習を行った。　（個人） ↓	15	○ モチーフを観察しながら着色練習を行い、よりよい混色のレシピを探ろう。 絵の具を少しずつ足していくと、だん ・ だん表現したい色に近づいてきたぞ。 実際に塗ってみると、少し色味が違っ ・ て見える。どうしたら良いのかな。	○混色する絵の具の選択に悩んでいる生徒の考えを引き出すために、モチーフの特徴を聞き取りながら助言した。 
（全体） ↓	5	○ 練習の様子を確認し合い、助言をしたり、よりよい表現方法に対する考えを深めたりしよう。 ・ 補色を混ぜてみると、くすんだ色合いになるな。 ・ 色味の調整をするために、もっと少しずつ混色してみよう。	○話合いの方向を明確にするために、着目するポイント（混色する絵の具の色や量、水の量など）を示した。 
（個人）	15	○ 話合いから考えたことを基に、よりよい混色のレシピを探ろう。 ・ 混ぜる色についてアドバイスをもらったから、こちらも試してみよう。 ・ もう少し水を加えてみると、みずみずしい感じに合うかな。	◎彫刻作品の制作に関心を持ち、自分の主題を基に、主体的に着色練習に取り組もうとしている。 （観察・デジタルポートフォリオ）
４　本時の振り返りをした。 （一斉）	5	○ 練習を通して発見したことを発表し、全体で共有しよう。 ・ よく観察したことで、もっと細かい色の変化を発見した。 ・ 色味は似てきたが、質感を表現するには塗り方も工夫する必要がありそうだ。 ○ 本時を振り返り、自己評価をしよう。	○表現方法を探究する面白さに気付き、次時の制作につなげさせるために、本時の自己評価をデジタルポートフォリオに記入させ、全体で意見を共有した。

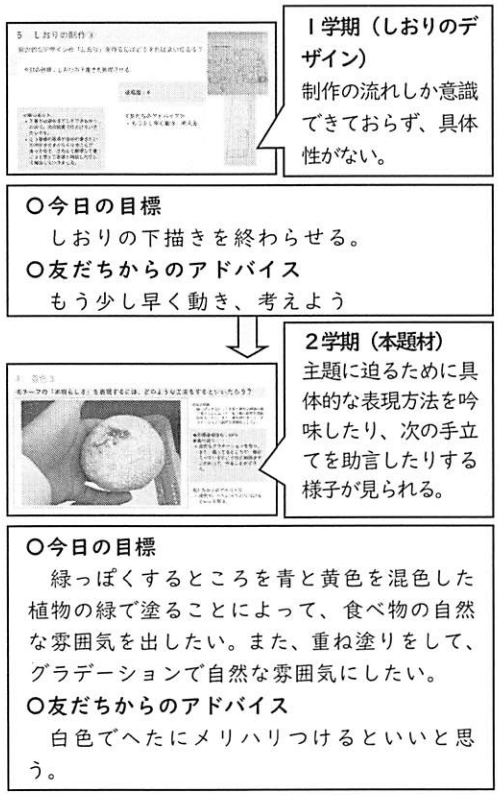
⑵　生徒の学びの実際

ア　デジタルポートフォリオを活用した振り返りと目標設定の工夫



資料１　デジタルポートフォリオ（本題材で活用したもの）

昨年度に引き続き、全学年でデジタルポートフォリオ（DP）を活用した。今年度は題材の見直しが持てるよう、全体や１時間ごとの目標、達成度、成果と改善点、助言の記録など、学習の段階に応じて記入する欄を設けた（資料１）。また、授業の始めや振り返りの場面において、デジタルポートフォリオを活用しながら生徒相互で成果や課題、目標設定について話し合い、助言し合う時間を設定した。それにより、生徒がより課題意識を持って取り組む様子が見られるようになってきた。しかし、１学期は生徒によって目標や助言がねらいに迫るものでなかったり、あまり具体性のない内容が見られたりした（資料２）。そこで、後述する鑑賞活動の工夫と合わせて、デジタルポートフォリオで学習の過程を確認させながら、目標や助言の観点を明確にしたり、新たな視点で考えたりするよう個別に支援を行った。また、生徒の意見の変化を全体で共有することで、より高い目標設定や達成のための手立てについて繰り返し指導した。



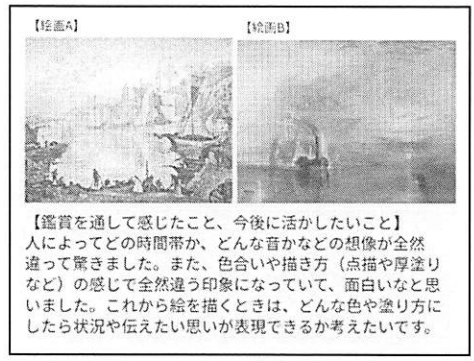
資料２　生徒の記述の変化

生徒がより具体的な目標を立てて表現方法を探ることができるよう、題材のねらいをしっかりと理解させ、作品の主題を明確にさせるようにした。本時の始めに題材のねらいを確認するとともに、粘土での制作を振り返りながら再度モチーフを観察させることで作品の主題（着色でモチーフのどのようなところを表現したいか）について考えさせた。生徒は野菜や果物の持つ重みや独特のにおい、みずみずしさ、腐敗などの変化、質感などを再発見し、１学期の学習経験を取り入れながら具体的な目標を考えることができていた（資料１・２）。目標が明確になったことで、着色練習においても詳細に色味を分析したり、加える水や絵の具の量を吟味したりしながら練習を進めることができていた。その後の授業においても、デジタルポートフォリオを活用することで、題材全体の目標を意識した上で１時間ごとの目標を考えたり、前時までの振り返りを確認して、目標設定を調整

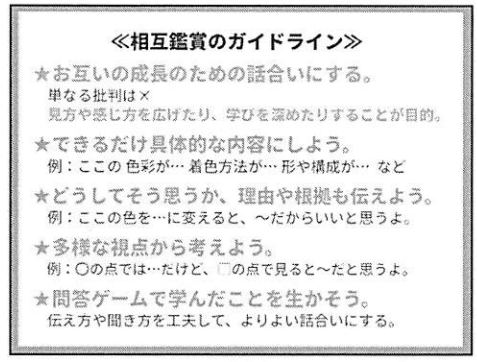
したりする様子が見られた。

イ　生徒のメタ認知を促す鑑賞活動の工夫

生徒作品の相互鑑賞に加えて、１学期に人物画の鑑賞、２学期に２枚の風景画の比較鑑賞を行った。比較鑑賞では、生徒に観点（時間、季節、音、匂いなど）ごとに感じた印象や、それらはどこから感じたのか根拠を話し合わせた。それにより、生徒が作品を詳細に観察し、論理的思考を働かせて、作品の印象や魅力と表現方法について関連付けながら考える様子が見られた。また、鑑賞の視点の多様性に気付かせるために、ペア活動で深めた意見を全体で共有し、考えの違いや共通点に着目させた。授業後の生徒の感想から、表現方法によって印象が大きく変わることや、多様な視点で作品を鑑賞することで、見方や感じ方が広がることを実感した様子を読み取ることができる（資料３）。



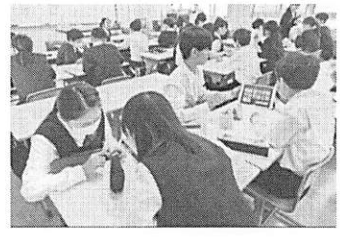
資料３　比較鑑賞の感想



資料４　相互鑑賞のガイドライン

生徒がこれらの経験で得た鑑賞の視点や論理的思考を生かして自他の作品を鑑賞することができるように、作品の着目すべきポイントやガイドライン（資料４）を示し、本題材において制作過程での相互鑑賞を複数回行った。生徒のメタ認知力の向上を促すため、個別に支援を行うとともに、ペアや班を変えたり、考えを深めている生徒の意見を全体で共有したりして、多様な意見に触れる機会を増やすようにした。また、美術作品には言葉にはし難い思いや表現があることを踏まえた上で、本校の言語教育の一つである問答ゲームと関連させ、自分の考えを表現することや、それをどのように相手に伝えるかについても意識させ、話合いの活性化を図った。相互鑑賞の機会を重ねるうちに、表面的な感想にとどまっていた生徒も、根拠を付け加えたり、助言や自分の意見を具体的に伝えたりすることができるようになってきた（資料２）。本時の目標を考える場面や着色練習について話し合う場面でも、他者の意見を取り入れながら自分の考えを深めようとする様子が見られた。生徒が鑑賞から考えたことや助言を制作に取り入れることで、目標設定の具体性が増したり、生徒が作品の表現方法を探究するための手立てを具体的にイメージし、どのようにアプローチしていくかを考えたりすることができた（資料５）。

・ピーマンの不思議なグラデーションや、緑の苦そうな見た目を再現するために、乾いた絵の具に水を塗ってぼかすことで、目立ちすぎる濃い色や薄い色を周りの色と混ぜた。他の人の意見から着想を得て、もう少し濃い色を少し塗り、周りの色と馴染ませるようにして、もっと苦い感じを出すようにする計画を立てた。
・鑑賞から、色の塗り方や絵の具の濃さなどを少し変えるだけで、鮮やかな感じになったり、ずっしりとした感じになったりと、細かい工夫で野菜や果物の特徴を表現できると学んだ。
・作品だけでなく、展示の台がアイボリーだとみずみずしさが強調され、黒だと色味が引き締まるような感じになり、背景一つでイメージが変わると気付いた。
・様々な角度から作品を見ることができるようになったので、色の塗り方や混ぜ方、水の量などを変えて、そのものに合った特徴をポスターカラーで表現できるようにしたい。
・自分が感じ取った雰囲気を表すためには、先を見通して、段階を踏んで制作していくことが大事であると思った。また、一つの視点だけではなく様々な視点から見ていくことが大事だと思う。



資料５　相互鑑賞の感想や振り返り（一部抜粋）

4　研究の成果（○）と課題（●）

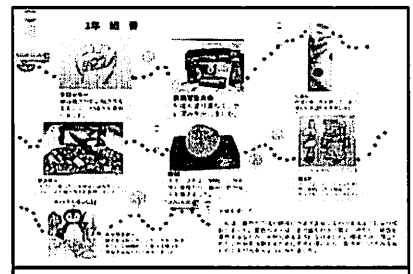
(1)　デジタルポートフォリオを活用した振り返りと目標設定の工夫

○テンプレート型デジタルポートフォリオの活用により、生徒が学習の過程をいつでも確認することができ、それぞれの目標達成への見通しを持ちながら取り組むことができた。また、制作過程の変化を振り返り、自己の成長を自覚することで、次の授業や題材に向けての意欲を高めることができた（資料６）。

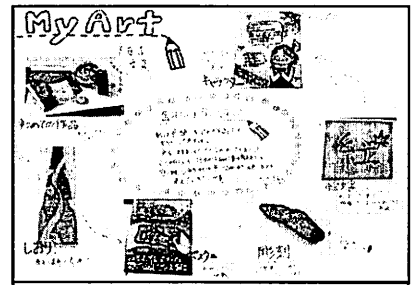
○毎授業の始めに目標を考えさせる場面では、デジタルポートフォリオを用いて前時までの取組を振り返ることで、生徒は自己の考えを客観的に見つめ直し、改善点を発見することができた。それにより、生徒の目標の具体性が次第に高まり、主題に迫る表現方法を複数考え、選択するなど、主体的な探究活動の促進に効果が見られた。

○生徒の考えや目標、自己評価などをロイロノートで共有することで、それらを助言や指導、評価に生かしたり、機会を捉えて作品鑑賞をする場面を設定したりすることができた。

●限られた授業時間の中で多くの活動を行うため、作品制作や振り返りが十分にできない場面があった。今後も生徒の学びが深まるよう活動内容を精査し、授業展開やポートフォリオの改善を続けていきたい。



私は、着色の方法や構成にさまざまな工夫ができるようになり成長しました。着色方法では、水の量をわざと変えてみたり、補色を活用したりするなどの工夫ができるようになりました。構成では、目立たせたい部分を強調するために大きく描いたり、動きをつけてみたりするなどの工夫ができるようになりました。



私は、色使いをどの作品でも大切にしてきました。色を工夫することで、イメージがわいてくるということが分かり、自分の作品の一番の魅力だと思います。２年生からは、色に込められている思いなども考えていきたいです。

資料６　学習の成果をまとめよう（令和５年度１年生）

(2)　生徒のメタ認知を促す鑑賞活動の工夫

○論理的思考や多面的思考を意識した相互鑑賞を積み重ねたことで、多様な視点から作品を捉えることができるようになってきた。また、相互鑑賞を通して他者の意見を知ることは、どの生徒にとっても客観的に自己を見つめるきっかけになっていた。生徒が作品制作に自信を持ったり、生徒相互に学び合い、制作方法の見直しや調整を進んで行ったりする様子が見られた。

●ガイドラインを示し、鑑賞のポイントを繰り返し学習しながら相互鑑賞を行ったことで、全体的に生徒相互の考えが深まる話合い活動になってきた。しかし、班やペアによって個別の支援が必要な場面も多く、他者の意見に受動的な生徒もいる。今後もこれらのことを考慮しながら指導や場面設定を工夫し、鑑賞活動の充実に取り組んでいきたい。

●人物画や風景画の鑑賞では、配色や着色方法の違いに着目させることで、ポスターの着色や彫刻作品の着色などの表現活動につなげさせることができた点もあった。しかし、表現活動と鑑賞活動の相乗効果を高められるような作品選定や単元構成とまでは至っていない。鑑賞活動で取り扱う作品や行う時期についても検討していきたい。

参考文献

・国立教育政策研究所教育課程研究センター（2020 年）「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」東洋館出版社
・鈴木有紀「教えない授業 美術館発、『正解のない問い』に挑む力の育て方」（2019 年）英治出版